大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

初年次ゼミナール覚え書き　3年めの試行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005859

初年次ゼミナール覚え書き　3年めの試行

堀　江　珠　喜

今年度も初年次ゼミナールを担当した。私のテーマは昨年、一昨年と同じく「将来エリートを目指す者には何が必要か？――を考える」であるが、進め方は現場対応しながら変えたので今後の参考資料としてまとめておきたい。今年は14名（女子2名、男子12名、工学域5名、現代システム9名）が受けるはずだったが、工学域の学生1名が必修科目と重なったという初歩的な選択ミスで受講を取り消した。初年次ゼミナールの時間帯をより限定し、そこには必修科目を入れないようにする取り組みが今後は必要ではあるまいか。

さて初回は全員の自己紹介と、このゼミナールを希望した理由を述べさせた。机を円形に並べお互いの顔が見えるようにしたのは例年通りだが、今年は大きく名前を書いた紙を机の前に貼らせた。この名札は以後毎週持って来て自分の名前を明らかにするように伝えたのだが、6月末になると3人ほどが貼らなくなった。おそらくは、もう自分の名前が覚えられたという気もあって面倒なことを避けたのだろうが、これは減点対象である。一週間に一度のゼミナールで、専門の異なる学生全員が皆の顔と名前を記憶したとは限らない。自分が知られていると自惚れるのは危険である。それを勘違いして議員や首長に立候補し落選する「ちょっとマスコミに顔を出す学者」の例は多いのだ。

常に自分をアピールする努力を、しかもこんなに簡単な方法ですらしようとしない者が競争に勝ち残れるはずがない。名無しの者の発言に加点できるはずがなかろう。大学教師は保育士ではないのだから、学習態度について何度も同じことを指導する必要はない。まして私のゼミナールは受講条件を「将来のエリートを目指す者」としている。それでも昨年も一昨年も「エリート」組に近未来において入れそうなのは3分の1から5分の1くらいに思えたから、3人の無神経さには別に驚かない。無断欠席が少ないだけでも昨年や一昨年よりはましといえる。

初回の後半は図書館ツアーに参加させた。今年のゼミナールの開始日は、ちょうど本年の授業初日に当たったので、図書館等施設の使い方を学ばせるには最適であったと考える。ただし私の目的は彼らの移動の様子をチェックすることでもあった。身障者でないかぎり、その歩き方に生活態度が反映される。その点、今年の学生は比較的行動が速く、昨年、一昨年よりは機敏に思えた。

第2回めは前回の宿題で「エリートに必要と思われる10項目」を考えて来させ、そのうち特に3項目を理由も添えて発表させた。

昨年は司会役を順番に担当させたが、今年はまず積極的にしたい者にさせ、希望者がいない場合は前回の司会者が指名することとした。そのため昨年に比べて司会進行はスムーズであった。志願すれば複数回の司会チャンスがあり、近い将来の入社試験におけるディスカッションの練習として有利かもしれないが、消極的な学生は司会を経験せずにゼミナールを終えることになる。日本式の教育では「不公平」とみなされそうだが、私は敢えて欧米式に競争原理を取り入れることにした。積極的な者がより多くの機会を得るというグローバルなシステムを体得して欲しいからである。

この回の目的は、主に次の3項目である。1. 幼稚な表現を改め、大学生として、あるいはしかるべきレベルの大人としての日本語を習得する。（たとえば「自分の考えを相手に伝えられる」は「コミュニケーション能力」、「今の自分に満足しないこと」は「向上心」と言い換えるのが適当である。）2.　正解のないことを考え続ける訓練。（大学入試なら通常一つの正解が必ずあるが、人生においてはそうとは限らない。）3. 人前の口頭発表に慣れ、質問や反論も自然体でできるようになるための訓練。

もちろんこれらはこの回に限ったことではないが、おそらく学生たちにとってこれまでの教育機関では学べなかった項目であり、それだけにこのゼミナールの意義を理解して欲しいのである。

第3回めのゼミナールでは2回めのそれぞれの意見や用語をもとに、もう一度10項目を考えて来させた。やはりそのうちから3項目を選んで発表の後、それらを白板に書いて議論させ10項目にまとめさせた。「なぜ10項目なんですか」との質問には「何項目でも構わないが、とりあえずは10項目を目安にしたら良いという程度のこと。しかるべき理由があれば数の変更は可能」と答えた。たとえば著書の章立て構想など、そのようになされるものである。幾つ必要かを真剣に考えるより、まずはおおよその数に合わせる努力をし、調整は最後にすれば良いのだ。ただし特に理由がなければ11よりは3から10、または12のほうが感覚的に落ち着きが良いということはある。私が各自に選ばせるのを3項目にこだわったのも、これが安定した印象を与える基本的な数だからである。それを教えると、翌週からは理由を無理にでも3項目を考えてくるようになった学生もいた。

毎年思うのだが90分のゼミナールはあっというまに終わってしまう。昨年に比べ、自由に発言する雰囲気がありゼミナールらしい。結局かれらがまとめた10項目とは、「自他管理能力」、「積極性」、「責任感」、「コミュニケーション能力」、「情報収集処理能力」、「判断能力」、「強運」、「経済力」、「思考分析力」、「努力」である。私としては「努力」が他と次元の異なる言葉に思え、違和感は否めなかったし、自己管理と他者に対するマネージメントは別物と考えるが、ひとまずこれらについては未完成のままにし、第4回めの宿題を言い渡した。それは「神に選ばれた民」であることを誇りにするユダヤ民族、またはユダヤ教徒についてどのような視点から

でも構わないので調べ発表の準備をすることである。

12 名の学生は私の予想通りパソコンで検索しただけだったので同じようなことを調べていたが、それでも興味の抱き方や検索のレベルの相違が伺えた。一人だけは「ユダヤ教とユダヤ人の歴史」についての書物を読んでいた。ウェブサイト全盛の世の中だからこそかえって紙媒体の重要性を私が強調したところ、この学生は翌週の宿題にも図書館を利用したようである。

杉原千畝について調べて来た学生が一人いたが、どうやら「ちうね」という読み方まではチェックしなかったようで、発表中は「杉原さん」などと誤摩化していた。それに対して「名前はなんというのですか」という質問を期待したが、気がつかないのか優しいのか、誰も尋ねなかった。杉原千畝は日本政府の方針に逆らってユダヤ人の命を救った英雄として扱われてきたが、実はスパイとして使っていたユダヤ人を逃がす目的があったり、日本政府としては決して反ユダヤ政策はとっておらず、むしろユダヤ難民には同情的で協力的でもあったことが現在では定説となりつつある。しかしこの学生の発表は「英雄」杉原と美談の面だけを見るものであった。

ゼミナールでは知識を教えるなと言われているが、後日、たまたま新聞で見かけた「命のビザ」の真実に関する記事のコピーを全員に配った。物事には「裏」があることに気がついて欲しいものである。その意味で、東京都立大学出身の政治学者、高山正之が『週刊新潮』4 月 3 日号に寄せた「米国が言うか」のコピーも渡した。ウクライナ問題を起こしたロシアに比べ、米国が「もっとあくどい分離独立をやってきた」様子をわかりやすく解説したエッセイである。学生たちは読まずに捨てたかもしれないが、エリートの条件として「情報収集、分析、判断能力」が必要であると認めた限り、その方法を学ぼうとしない者のことまで私は知らない。

ちなみに学生にはエミレーツ航空が作成したドバイを中心とした運行世界地図も配り、日本の位置が見方を変えればアジアの小国に過ぎないことを認識させようとした。学生に感想を尋ねたところ一人から、経済力のある地域に多く飛行していると的を得た答えが即座に返って来た。このゼミナールではアラブについては触れなかったが、この航空会社が世界中の主要地域に航空網を張っていることが一目でわかる地図により、アラブ首長国連邦および周辺諸国の実力がうかがえるのである。

また 5 月 11 日付け「ル・フィガロ」の経済版で見つけた「中国から米国まで TGV を走らせる構想」についての記事も、フランス語ではあるが地図と 13000km との文字は理解できると思い配った。この記事についてパリのフランス人は好んで話題にしていたが、日本経済新聞編集局長は知らなかった。またネットを調べても日本語のサイトには出ていない。だが、技術的には実現可能というこの構想こそ、ジャパンパッシングにつながるのである。情けないことに学生の誰一人、TGV なる言葉を知らなかった。本当にゼミナールで知識を教えてはいけないのだろうか。乗り心地は極めて悪いがフランス新幹線は、日本の新幹線の最強ライヴァルだとい

うのに。

さて私がユダヤ民族や宗教について調べさせたのは、あまりにも日本人がそれらについて知らなさ過ぎるからである。無知なので差別感情を持ち合わせないのは結構だ。しかし、本学の教授や東大卒の一部上場会社勤務エリートですらユダヤ系白人の存在を知らなかったり、ましてや彼らが金融ビジネスやダイヤモンドのマーケットを牛耳り、西洋では画商、精神分析医、弁護士、バイオリニストなどの音楽家、芸能人に多いなどとは夢にも思っていなかったりするのが現実である。ところが、私自身もシアトルやニューヨーク、ロンドン、パリなどにユダヤ系白人の友がいるが、親日の白人にはユダヤ系が多い。米国におけるユダヤ系の強力な存在を認識しておくことは重要である。かつて私がイスラエル大使館主催のパーティに出席したときも、ユダヤ系客の多くは米人であった。そこへ自民党の大物政治家が勢揃いし、米国とイスラエルの絆に一目置かざるを得ない日本の現状が伺えたのである。

従って、学生にも早いうちにこの特殊な民族についての知識を持っておいて欲しかった。なにより、彼らが近い将来、親しくなる白人は、かなり高い確率でユダヤ系と予想される。欧米で研究するようになれば、なおさらだ。私の神戸女学院大学時代の恩師は、ユダヤ系ドイツ人でアメリカに渡りノーベル物理学賞を受けたベータ博士の長女であった。

さて第5回めは「中国のユダヤ」と呼ばれる客家について調べさせた。ウェブで「中国のユダヤ」を検索し、その通り中国に渡ったユダヤ人について発表した頓珍漢も2名いた。このうち一人の学生は翌週の発表も中途半端で意味不明なところがあった。ネットで調べ、たまたま読んだことを疑いもなく写して来たようである。おそらくは、教えられたことを学ぶのは良いが、自分から調査することが苦手なのだろう。それならなおさら「情報収集能力と分析力」を高めなければなるまい。それ以前に疑問を持つ能力も身につける必要がありそうだ。いや、疑問の裏付けとなる知識がやはり必要であろう。それともそれは感受性の問題だろうか。このゼミナールが終わる頃には、疑う力を少しは培って欲しいものである。

学生に客家について調べさせたのは、この民族が華僑のわずか8%と言われているのに優秀で結束力が堅く「最強」だからである。たとえば古くは朱子や王陽明、近代史では「太平天国の乱」の洪秀全、孫文、その妻の実家である財閥の宋家、近年では中国の鄧小平、李鵬、台湾の李登輝、シンガポールのリー・クアンユーなど、蒼々たる面々がいる。日本では名前を知られていないがタイやインドネシアでも客家の有力者は多い。国際社会では西洋のユダヤ、東洋の客家と仕事をする可能性が高いわけで、近い将来関わることになりそうなその存在を学生たちに知っておいて欲しかった。

ちなみに私には40年ほど前から台湾出身の客家の友人がおり、実は彼から「ハッカ」という存在を知ったのである。そういえば日本の中華街に客家料理の看

板を見た記憶があるが、誰からもその意味を教えられたことがなかった。彼には台湾人よりも客家という自覚が強く、20代でベルギーに渡るとその地で国籍を取り、以後、ベルギーのパスポートを用いて、ビジネスで世界中を飛び回っている。私が知る限り、中国で工場を経営し、ロンドン、ベルギー、台湾、ロサンゼルスに家を所有している。家族も各地に散らばっているのだ。鄧小平時代に欧米企業が中国進出をするにあたり、口利きをして財を成したものと思われる。共産党幹部への賄賂も企業から直接渡すわけにはゆくまい。以前にそんな賄賂について彼から聞いた記憶があり、彼が賄賂の中継ぎをしたとも考えられる。一見、日本人に見える顔立ちだが、生き方はまるで違う。しかし将来の日本人には、彼のような逞しさが必要になるかもしれない。

さてユダヤ、客家とは異なるエリート集団WASPについて調べ発表するのが第6回めである。第5回めの最後にWASPの意味を学生に尋ねたが、誰一人まともに答えられなかった。しかしWASPは米国社会を考える上で、重要な、しかも日本人にとっては少々厄介な存在である。第6回めはTAの大学院生2名にも参加してもらった。第12回めのゼミナールで例年通り、パワーポイントの効果的な使い方と、先輩として後輩の悩みを聞いてもらう予定であった。そのために学生の様子を事前にチェックしてもらったほうが良いと考えた。今年も工学研究科の綿野教授に推薦していただき、優秀な男子院生2名が担当してくれることになった。

WASPは、誤解を恐れずに言わせていただくなら、米国における人種差別の元凶をなしている。彼らが主義主張、感情を改めない限り、米国での人種差別はなくならない。彼らが差別するのは厳密に言えばアングロサクソン系プロテスタント以外のすべての人間である。当然ながら日本人もジャップと蔑まれるし、どれほど優秀であってもユダヤ系は嫌われる。学生には米国での、いや白人社会における有色人種差別感情を認識してもらうとともに、白人であってもユダヤ系やアイルランド系、ラテン系は差別の対象となる事実を知って欲しかったのである。さらに言えば米国の超エリート集団としてはWASPにMを加えなければなるまい。M、つまりmale、男性である。そこで学生には私の神戸女学院大学院修士課程時代のディスカッション体験を話した。

35年前だが、合衆国では黒人男性と白人女性とでは、どちらが先に大統領に就任するかというテーマで話し合うことになったのである。当時は今より黒人差別感情は強かった。しかしながら、我々の予想は、白人女性より黒人男性が有利というものであった。その通り、ヒラリーはオバマに負けたのである。

もうひとつ、学生には私のWASP体験について語った。欧米で親しくなる白人はユダヤ系かラテン系がほとんどで、WASPとの接触を持つ機会のない私だが、高校2年生のとき、YMCAの紹介でロサンゼルスのWASPの家庭に3泊させてもらったことがあった。ここでもプロテスタントの力が働いているのである。上品な家族であったが、それまでシアトルやサンフランシスコで泊めてもらったユダヤ

系、ラテン系、アイルランド系に比べて、なんとなくよそよそしかった。それもそのはず、WASP 中の WASP とも言うべき、1620 年にメイフラワー号で英国から米国に渡ったピルグリム・ファーザーズ（清教徒）の誇り高き子孫だったのである。大きな競泳練習用プール付きの豪邸に住んでいたから、高収入で社会的地位も高かったのだろう。それで、社会や教会に対する奉仕として、私を受け入れてくれたものと思われる。ただし日本についても日本人についても、さらには私についても興味がなかったのだろう、その年に私が出したクリスマスカードに対して返事は来なかった。その他のホストファミリーや親しくなった米人等、20 通余りものカードが私に届いたにもかかわらずである。

第 7 回めは、ユダヤ系もしくはユダヤ人、客家、WASP を比較しながら、第 3 回めに話し合ってまとめたエリート 10 項目との関係について考えて来させた。私が彼らに気がついて欲しかったのは、我々は WASP にはなれないということである。しかしユダヤ系や客家がたゆまぬ努力で実力を持ち、社会で伸し上がっているように、我々にもチャンスがないわけではない。問題は積極的にそれを摑むか否かなのである。この回では第 9 回めに英語でプレゼンテーションするためのテーマを話し合わせた。昨年は自分が行きたい国についてであったが、今年は「日本文化について」、「尊敬する人」、「休日の過ごし方」などがあげられたものの、結局は「自分の好きな_____」と範囲を広げることとなった。この目的は聴き手に理解できるように簡単な英語の言葉とセンテンスで説明することである。従ってテーマ自体は重要ではない。（Simple, easy English でのコミュニケーション法は、いつも私が英語のクラスで教えていることだが、偶然ながら今年のゼミナールには私の英語のクラスの履修生はいない。）

英語のプレゼンテーション準備に 2 週間を与えることにし、第 8 回めには「好きな授業、嫌いもしくは苦手な授業」を紹介するというオフレコ・ゼミナールとした。ただし私の授業（この場合はゼミナール）は対象外とした。説明には what, why, how の視点を入れること。つまり、どんな授業なのか。なぜ好き（または嫌い、苦手）なのか。どうすれば（さらに）良くなると思うか。を述べさせるのである。この回の目的は、私自身が密かに学生の好みを把握したいという狙いもあるが、彼らに愚痴を吐き出させてガス抜きをするとともに、その場を共有することによって仲間意識を高めさせたいのである。

そして最大の目的は、スピーチ、プレゼンテーションや授業を行う機会に備え、どのようなやり方や資質が相手の心を摑むのか否かについて考えることだ。現在はパワーポイント全盛の時代で、好むと好まざるとに関わらず彼等の世代は使わざるを得ない環境に置かれるはずなので、私も TA にその指導を毎年依頼する。だがパワーポイントが普及するにつれて、アンチパワポ族も現れるようになった。実は私もその一人で、いかなる講義も講演もアナログ手法で行う。つまり（場所が広ければ）ハンドマイク、必要なら板書、紙媒体の配布資料を用いるやり方である。先

日、本学の関西経済論の（まったく面識の無い）一般参加者に廊下で呼び止められ、「幻灯（パワーポイントのことをわざとこの方はこう呼んだ）ばかりでつまらん。あんなものを使わずに話せる講師を呼んでくれ」といわれてしまった。私はその講座には何ら関与していないのだが、アンチパワポの気持ちは充分理解できるので、相槌だけは打っておいた。

一般論として話芸に欠けるスピーカーがパワーポイントでもっともらしく仕上げることは多い。だから余計に退屈な講演やプレゼンテーションになるが、暗くしてくれるので聴き手にとっては安眠できるという利点もある。実際、ゼミナールでは一人の学生が本学某教員（実名はここでは伏せておく）の授業を、「パワーポイントとテキストを読むだけで退屈。学生の反応を見て欲しい」と酷評していた。ただ文句を言うだけではなく、この学生は「ハズレな授業から逃げてはいけない、諦めるという選択肢はいつでもできる、過去は変えられないが未来は変えられる」と格好をつけていたのが印象的であった。

学生たちに好評だった授業の共通点とは、もちろん授業の内容がわかりやすく、充実していることであるが、役立ちそうな雑談が面白いとの指摘も多かった。私としてはこのような意見は想定していた。学生たちには受験勉強的な知識だけではなく、ユーモアや雑学が魅力的なエリートにとって必要であると気付かせることができたと考える。

第 9 回めは前述のように英語でのプレゼンテーションなので、私も教室に入るなり日本語を使わず、英語で司会を務める希望者を募ったところ、一人の工学域生が率先して引き受けてくれた。この頃になると、一部の学生にとっては、自分のペースで仕切れるので司会が苦痛でないばかりかむしろ楽しい、という風潮がうかがえるようになった。

学生は全員が予め英語の完全（と彼等は思ってるが文法ミスだらけの不完全）原稿を用意し、それを読んだ。さらには、聴き手が理解してくれるように、ゆっくり、はっきりと読むように何度注意しても、自信がないのか、速く読むことが英語の達人とでも勘違いしているのか、といった学生もいた。

しかし嬉しいことに、この英語のプレゼンテーションは意外にも盛り上がったのである。なぜか、聴き手の反応が素早く、日本語のときよりも活き活きしているのだ。ひとつにはテーマが気楽な“I like ___ ”なので、好きなミュージシャン、スポーツ、サッカー選手、食べ物、景色、映画監督、街、季節、科目などと話題が広がり、雰囲気が和やかになったのだろう。多少は彼らの遊び心を刺激したようで wow! や really?, why? などとスピーカーに突っ込む場面も見られた。極めて日常的なレベルの会話で、誰でも発言に参加できる。なにより、日本語と違い、英語の場合は、日常語とプレゼンテーションのときの言葉遣いにあまり差がないし、上下関係、男女間でも使い分ける必要がない。それゆえに率直な意見が出やすいと思われる。たとえば現代英語において二人称は you しかないのだ。それにひきかえ、

日本語はいったい幾つあるのだろう。教師が学生から「あなた」などと呼ばれれば不愉快に決まっている。その点、英語ならよりリベラルな議論が展開できる可能性があるのだ。

しかし昨年は、このような楽しい反応はなかった。テーマも決して難しいものではなかったが、やはり学生の資質によるところが多いのだろう。とすれば、やはり学生と接しながらの現場対応が、このゼミナールには求められるのではあるまいか。「行き当たりばったり」の授業に思われるかもしれないが、この回の最後に学生たちに英語プレゼンテーションの感想を聞いたところ、「楽しかった」、「またやりたい」との声が大きく、2週間後に再度、同じテーマで、ただし今回出た話題以外で行うことにした。学生が積極的に希望することは叶えたいし、聞けば英語のクラスでこのように英語をしゃべる機会はないとのこと。（私の英語のクラスなら日本語を使わせないのだが。）

ただし敢えてこのとき多数決をとらず、文字通り声の大きい学生の発言を取り入れた。反対意見は出なかったが心の中ではどう感じているか分からない。先生は全員の意見を聞いてくれない、不公平だとでも考えているかもしれない。だが私としては、自己主張しなければ他人の思い通りに事は進んでゆくというグローバル社会のルールを、実感して欲しかったのである。反論しないかぎり賛成意見とみなされるのである。彼らに2週間という余裕を与えたのは、初歩的な英語文法を踏まえて原稿を用意させるためである。He don't でも通じるが、準備時間があるのにこれでは困る。このゼミナールのTAはM2の学生たちだが、この5月に北京の国際学会で英語のプレゼンテーションをしている。つまり5年後にはこのゼミナールの学生の中には国際学会に参加するものがいても不思議ではないのだ。ちなみにこの2人とも、大学一年の英語A科目は私が一年間担当した。当時の成績をチェックすると、それぞれ95点と85点と優秀である。英語の成績が専門領域における成績と呼応するといわれるのも納得できる。昨年のTA女子院生もやはり私の英語Aの元受講生で、90～95点をとっており、M2になるときには早々と修了後の就職が難関有名企業に決まっていた。

つまり私の英語授業における採点は、かなり正確に学生の実力を表しているということになる。本学の英語科目においては最近、採点における公平を保つために相対評価の導入が促されているが、私は絶対評価のほうがはるかに公平で学生の勉学意欲を刺激すると考える。私の母校神戸女学院中学・高等学部では、世間が相対評価をしていた頃、すでに絶対評価で成績を出していた。こちらのほうがよりグローバルな方法だし、現代の学生は義務教育においても絶対評価を受け、すでにこちらに馴染んでいる。大学においてはどの科目においても担当教員が責任を持って採点するものであり、それに対して苦情があれば、当然ながらその教員は説明できるはずだ。少なくとも私にこれまで苦情は来なかった。

だが心ならずも相対評価に変えて苦情が来ても、私には「大学側の希望だから」

という以外に説明できない。事実そのようにクラスで説明する教授もいるらしいが、学生はそんな教員を馬鹿にしている。これでは教授としての尊厳が保てるはずがあるまい。私は絶対評価の方針を変える気はない。英語のクラスでそう説明したところ、反対の発言も匿名の投書もなかった。それどころか学生たちは相対評価を嫌がっているという強い印象を受けた。議論も尽くされず、一枚の通達文で左右されるほど私の意志は弱くない。第一、極端に甘過ぎたり辛過ぎたりの評価を下す教員の存在は、そもそもが雇用者責任なのだ。グローバル社会で活躍する人材を育てたいなら、私の教え子たちに害を及ぼさないでいただきたい。

さて第10回めは各自が数多い国内外の社会問題からトピックスを選び、what, why, how の視点でプレゼンテーションを行うこととした。「日本のゴミ問題」、「愛国心の低下」、「脱法ハーブ」、「女性の社会進出の遅れ」、「育児休暇」、「ブラック企業」、「いじめ」、「原発」などどれも大きな問題が挙がった。そのたびに聴き手から質問や発言があったり、私もコメントせざるを得ないこともあり、時間切れで「少子化」、「犬の糞」、「水問題」を用意して来た3名はプレゼンテーションができなかった。しかし同じトピックスを準備してきた者には先のプレゼンで追加発言または反論するよう司会者に促させたので、「少子化」なら「女性の社会進出の遅れ」で、「犬の糞」は「ゴミ問題」でなにか言えたはずではないか。また「原発」では推進派の学生に対し「福井原発に大事故が発生したら琵琶湖が汚染され、我々は生活用水に困る可能性大」と私がコメントしたので、「水問題」はそこでも語れたかもしれない。なお司会者は必ず「次にプレゼンをしたい人」と希望を募っていたので、消極的な学生にはその機会がなくなったわけである。つまり、待っていれば必ずチャンスが巡ってくると思い込んではいけないとの教訓が得られたはずなのだ。

いつも私のコメントは当然ながら19歳の学生の発想を越えた、少々意地悪なレベルで行う。たとえば「脱法ハーブがいいわけではないが、交通事故にしろ健康被害にしろ、数字としては飲酒が原因の事象がより多いはず。イスラム教では飲酒を禁止しており、国によっては禁酒法がある。なのになぜ日本では、酒の販売規制が甘いのか。麻薬や脱法ハーブに比べて、簡単に入手できる分、危険といえまいか」との旨を投げかける。すると学生たちは、それもそうだという表情を浮かべ頷いていた。積極的な学生が「たぶん政治家は酒が好きなのでは？」「酒造メーカーや販売会社から政治献金？」と発言する。そうそう、いい調子だ。世の中はそのように動いているのだ。

この回で意外だったのは、ちょうど時期的・全国的に反対意見が席巻していた「集団的自衛権」について、誰も、「愛国心の低下」を挙げた学生ですら言及しなかったことだ。彼らにとって深刻過ぎる話題なのかもしれないし、コロコロと変わる与党の説明について行けないというのが本音かもしれない。この前日に他大学の在日韓国人教授と意見交換をする機会があったのだが、「息子の代になったら彼の意志で帰化していいと言っているが、どうやら日本で徴兵制が復活しそうなので悩

ましい」とさすがに社会変化に敏感であった。在日の場合、韓国の徴兵は免除される。ただし、一定期間以上韓国に留学すればその義務が課せられるように最近法律が改正された。息子にとってもっとも安全なのは、徴兵年齢を過ぎてから帰化することであろう。しかし、そのまた子供は、当然ながら日本人としての義務を負うことになる。確かに選択肢があるだけに悩ましい。けれども選択肢のない日本人学生たちが、まさか「集団的自衛権」に無関心とは思いたくない。

さて第 11 回めは再度の英語のみによるプレゼンテーションであった。自分の好きなものを紹介するというテーマは前回と同じである。もちろん司会も英語で行うのだが、このゼミでいつも積極的な、（渡航経験もないのに）発音のかなり良い男子学生が自発的に引き受けた。（彼自身も発音の良さをある程度自覚しているようで、司会役を楽しんでいるようであった。）好きなサッカーチーム、場所、歌手、動物、科目など、なにしろ拙い英語でのやり取りなのでたわいない話題ばかりだが、そのおかげで誰でもコメントの機会が得られる。自分から同意、反対、質問の出来る学生もいるが、出来るだけ司会者に全員の意見を尋ねるように仕向けた。

たとえば犬が好きという話があれば、全員に好きな動物を尋ねさせる、またサッカーについては W 杯でどの国が優勝すると思うか、その理由を述べさせるのである。司会者は、南米チームは応援と期待のプレッシャーのため実力が発揮できず、ヨーロッパ、おそらくフランスが勝つと主張した。ドイツ、ベルギー、オランダを予想したのが各々一名で後の学生はブラジルかアルゼンチン、もしくは興味が無いとの返事であった。私もまったく W 杯には無関心だったのだが、この授業以来、学生の予想が気になって試合結果を確かめるようになってしまった。というのも、司会者は「プレッシャー」を主張したが、私は「プレッシャーに最も弱いのは現代日本人なので、我々の感覚で判断してはいけない。豊かで安全な日本とはかなり違う環境で育った南米などの選手はタフだ」と反論したためである。何事においてもグローバルな感性を身につけて欲しいのだ。もちろん、どこが勝っても不思議ではない強豪が残っているわけで、西欧国が優勝する可能性も大きいのだが、安易に敗因を「プレッシャー」と片付けるべきではない。それを撥ね除けてこその実力である。

それはともかくとして、この英語のディスカッションは好評で、「日本語で行うより数倍楽しい」と後日感想を述べた学生もいた。

第 12 回めは、TA にパワーポイントの効果的な使い方と、先輩としてゼミ生たちの大学生活や近い将来についての相談や質問の相手をしてもらった。昨年のような馬鹿げた質問（これについての詳細は昨年度に発表した拙論参照）はなかったようだが、「工学域の学生たちがおとなしいのであれでは就職に不利」と TA たちは先輩として心配していた。また早くも大学院進学に興味を示しているある学生についても「それより社会に出たほうがよいタイプ」というのは私と同意見であった。だがおしなべて、ゼミ生たちの優秀さを TA たちは認めていた。確かに昨年と一昨

年に比べれば、現代システムの学生の質が良くなった。（もちろん例外もいる。）これは私が教える英語のクラスについても言えることで、過去2年および人間社会学部時代と比べても、今年の現代システム1年生のレベルはやや高い。その理由はわからない。私の基準が甘くなったのだろうか。

第13回めは拙著『いい加減な人ほど英語ができる』を読んで、もっとも印象に残ったことについて発表させた。著者の私を前にして批判めいたコメントを慎むのはさすがに大人の対応である。そのなかで、英語の発音について自信のないらしい発言があり、これまで発音を習っていないとか、府立大の英語の時間にシャドウィングをやらされているものの、発音の仕方の説明がよくわからなかったとのことだったので、第14回めは、英語の発音や文章の読み方について私がプリントを用意して説明することにした。

私自身、神戸女学院で英語（米語）の発音を中高部でも大学でも徹底的に教えられたので、わりに近年まで正確な発音が大事と思い込んでいたが、イギリス英語とアメリカ英語の発音は異なるし、現実には様々な人種の人々が訛の強い英語で生活しているわけで、とにかく総合的コミュニケーション能力が重要と今は考えている。そのため授業でも、あまりひどい間違い以外は、発音を矯正しないが、英語科目の補講では「知っていて損のない英語の発音のコツと英文の音読リズムと表現」について教えることがある。そのプリント教材があるので、このゼミでも用いた。なお私自身は、アメリカでは米語、イギリスではブリティッシュ・イングリッシュを、そして授業ではアメリカを舞台にしたテキストの場合は米語、英国の場合はブリティッシュ・イングリッシュを話すことにしている。（ちなみに関西人相手には関西弁で、非関西人には標準語で話し、在阪局の番組では関西系のアクセント、全国放送の場合は標準語と使い分けてもいる。）

13名中、これまで発音記号を学んだことがあるのは、なんと2名だけだった。発音記号を知らなければ辞書で読み方をチェックできない。用意した発音記号一覧表をもとに母音と子音、有声音と無声音、日本語には絶対にない発音を説明しながらカタカナ的発音とネイティヴ的発音との違いを理論的に教えると、興味深そうに練習し納得していた。さらにリンキング、強弱、リズムに気を配りながら感情を込めて音読させ、日本語と英語の表現の違いについても学ばせた。

このときの音読材料は『くまのプーさん』の冒頭部である。児童向けの物語だが、英国文化に精通していないと、訳せても理解できない箇所があるのだ。数年前に某学生部長が「英語教育では文化を教えなくてよい」といわれたので、それ以来、文化を知らないと理解できない教材をわざと選ぶようにし、学生に文化と言語が密接に関わっていることを認識させてきた天邪鬼の私である。もちろん人に読み聞かせるために書かれた『くまのプーさん』を音読する際の表現力は、英語を話す時にも、そして近未来の英語でのプレゼンテーションにも役立つはずである。

神戸女学院大学英文科の発音学の授業半年分を90分に集約するのだから、学生

は大変だと思うが、英語英文学が専門でない学生に対して、このようなことであまり多く時間を割くのもいかがかと思われる。後に疑問が生ずれば、いつでもオフィスアワーに訪ねてくれれば相手をするので、あくまで「入門編」というか体験レッスンという位置づけである。それでも全く知らないよりは、なんらかの刺激になったものと信じたい。今回ゼミナールでつくづく感じたことは、コミュニケーションを重視するなら英語こそ15名体制のクラスが望ましいということである。30人クラスで週に2回よりは15人で1回のほうが、大学では効果が得られるのではあるまいか。

この回には英語発音を始める前に、ゼミの締めくくりとして今後注意すべき3点を言い渡した。まずは雑学力の大切さである。私のような文系はもともと雑学勝負のような分野なのでそれなりに日常的に幅広い知識を得ようとする傾向があるが、理系は専門に特化しその分野での激しい競争に打ち勝たねばならない。そこにとりあえず雑学は不要である。だがやはり柔軟な発想や人を惹き付けるような情報発信にも、雑学力が関わるものである。そこで理系こそ、意識して自分の分野以外のことに目を向けるべきなのだ。私が院生のころ「学際的」という言葉が流行っており、私の学術博士号などまさにそのような学問大系の申し子のようなものであったが、現在日本では「博士（学術）」の輩出数は増えたもののその雑学的実態は当初の目的を果たしているのだろうか。

さて2点めは、英語も大事だが、それよりもまず日本社会で生きてゆく彼らには標準日本語が話せるように自分で努力する重要性である。訛や方言が、素朴さや純真さをアピールするのに効果的なことは、テレビショッピングで証明されているが、現代日本においてエリートを演出するためには、やはり標準語が必要な場合もあるのだ。本当はゼミでも標準語を強制したかったのだが、それでは緊張しながらの発言にさらにプレッシャーをかけてしまうので、とりあえず活発に人前で話すことに慣れされるだけで4ヵ月が経ってしまった。

教えたいこと、学ばせたいことは他にもあるが、3点めは、高学歴プアにならないよう、大学院進学を望む者は「出口」情報を確認するように、ということで締めくくった。またこの回の最後には、第15回めに授業のまとめとして、90分で「このゼミナールで学んだこと」をテーマにエッセイを書かせることを予告した。彼らに渡す用紙は各自一枚（B4）のみで両面に書いてよいし、片面だけでもよい。長さの判断は各自の良識に任せるのである。

私の昨年と今年のゼミでは結局レポートを書かせなかった。最初の年の反省として、多くの学生はまだそこまで到達していないと思われたからである。つまり、調べる、プレゼンテーションする、それも小さな課題で短い時間の発表が限界であり、まだ分析し、オリジナリティを加味できる結論を導きだせるレベルには達していないのである。この段階で無理にレポートを書かせたなら、コピペになるだけで、逆に、それがレポートと彼らが見做す危険を感じた。レポートはせめて20分

くらいのプレゼンテーション能力を身につけてからのほうが無難と考える。ただし、この最終回のエッセイについては、持ち込みは自由で、そのかわりに大学生らしい文章、大学でのテストというよりむしろ入社試験を想定した文章を求めた。そのために一週間という準備期間を設けたのである。

さて第15回めは、予告通りのエッセイを書かせるとともに「このゼミナールでの自分の貢献について自己アピールしなさい」との小テーマを突然与え、おそらくは準備した文章と、その場で考えて書いた文章を比べることにした。さらに日本人が下手な自己アピールについても経験させたかったし、このゼミナールでの各自の立ち位置の認識も知りたかったのである。

この筆記作業の結果として、意外にも、普段の授業でよく調べ賢そうに発言をしている学生の一人が、かなりいい加減な内容と文章のものを平気で提出し、また日頃の発表ではレベルの低い内容を大阪弁でしゃべる学生が、しっかり準備しており、それぞれの得意・不得意が伺えて興味深かった。そんななかで、優秀な学生たちが指摘した次の3点は、このゼミナールならではの結果と思われた。

まず、最初はインターネットで調べていたが、それでは他の学生と同じ内容になるので書物による情報のほうが役に立つし、記憶に残ることがわかったようだ。そして私が常に学生に言っているようにWHAT（状況説明）だけではなくWHY(なぜなのか？）とHOW（どうすればいいのか？）の視点で考え分析するようになったということである。

次に議論についてだが、「好きに理由は要らないが、嫌いにはもっともな理由が必要である。簡単に『嫌い』というべきではない」との私の言葉（授業中に「韓国は嫌いだ」と言った学生に私が注意した言葉）を覚えていて、「理論的」であることの重要性を学んだようである。また「僕は堀江教授と反対意見を持ったとき、僕はただ食ってかかるところがあったが、堀江教授は僕の意見を理解しながら自分の意見を論理的に説明していた」との反省もしてくれていた。私はこのように反論する学生を歓迎した。一方的に相手の意見を抑えつけるのではなく、よく聞いてその矛盾点や弱点をとらえて論破するのである。教師としてはとにかく、余裕ある態度で接するべきである。博士課程在学中にドイツ哲学専攻の男子学生（現某国立大学教授）と議論していつも言い負かせていた私には、府立大の学生相手なら白を黒と言い張る自信すらある。

最後に男子学生がこのように記した――「このゼミを終えて思ったことは『人生をもっと楽しまなきゃ！』ということ。堀江先生を見ていると自然とそういう気持ちになった」。そしてその理由をあれこれと挙げていた。おしなべてこのゼミが楽しかったというのが皆の感想であったが、私自身も楽しんだ。というより、自分が楽しめるように授業を導くのは私の常套手段である。教師が楽しめないような授業が、学生にとって楽しいわけがなかろう。彼らが喜ぶはずもない。受験を終えたばかりの学生は、ほとんどがまだ高校生のマインドであり、大学生活に不安も抱いて

いて当然である。そんな時期にゼミナールは変形ホームルームのような役割も担っているのではあるまいか。2014 年 6 月に日本政府が発表した「男女共同参画白書」によれば、幸福と感じている男性が 3 割以下、女性が 3 割以上だそうだ。そんな時代に「人生を楽しめ」と私が（言葉ではなく雰囲気で、あるいは身を以て）図らずも教えているのはあながち的外れではなかったようである。